

住工混在地域における混在の状況と地域に対する 住民・工場主の評価からみる住工共存に関する研究

STUDY ON COEXISTENCE WITH HOUSES AND FACTORIES, SEEN IN THE SITUATION OF MIXED AREAS AND THE APPRECIATION OF RESIDENTS AND FACTORY'S OWNER TO THE AREA 建築計画分野 八島 武之

一般的には否定的に捉えられてきた住工混在地域では、単一用途地域ではなし得ない多様な住まい方がなされ、半世紀以上にわたり持続してきている。本研究では、成立背景や地域特性の異なる住工混在地域を5地区選定し、住宅地図の読み取りや現地踏査、住民と工場主に対して生活環境や地域のつながりに関するアンケート調査を行い、混在の様相と住民・工場主の地域に対する意識を明らかにした。そして、それらから各地区の共存の特性について考察をしている。Mixed areas, where it has been generally caught negatively, continue more than half a century while living variously. This research selects five areas where the regional characteristic is different, and the reading of the map and field survey, a questionnaire survey to a resident and a factory's owner were performed. This study makes the situation of mixed areas and the appreciation to an area of a resident and a factory's owner clear. And it's being considered about the characteristic of the coexistence with houses and factories in each area.

1 はじめに

これまでの成長型社会を背景とした近代都市計画では、用途分離・純化というゾーニング手法がとられてきた。公害激甚期には、住工を分離させていくことを目指した三村らの一連の研究¹⁾があるが、住工を完全に分離させることは難しく、一定地域内での共存や工場アパートなどの提案も行われている。

それから50年が経とうとしている現在、低成長時代を迎え、人口減少や高齢化、都心の空洞化、資源の有効性といった様々な社会問題が顕著となり、都市機能の集約化・混在化による完結的なまちづくりが求められているが、その手法は模索されている。

一方で否定的に捉えられてきた住工混在地域は、生産の場(工業)と生活の場(住居)が混在しながらも、半世紀以上にわたり持続してきている。近年、住工共存を目指した研究もみられるようになり、角田²⁾は地縁・血縁・職縁を中心として多元化したネットワークが織りなす豊かな住環境や多様な住まい方が存在することを明らかにしている。しかし、その他の多くの研究は土地利用変化や居住環境、まちづくりの現状と問題点、可能性などを明らかにしているが、混在の状況と住民や工場主の意識から混在地域を評価しているものはみられない。

そこで本研究では住工混在地域に着目し、混在の状況と住民・工場主の地域に対する意識から住工共存の

有り様を明らかにすることを目的とする。本研究の意義はそこにあり、半世紀以上持続してきた住工混在地域を用途複合のまちづくりの一例として捉えることで、都市の新たな方向性を得ることができると考える。

2 調査概要

大阪市内及びその周辺部に位置する住工混在地域のうち、立地や集積産業、混在の程度などが異なる5地区(図1)を選定し、以下の調査を行った(表1~2)。

調査	日時	内容	表1 調査概要			表2 アンケート回収率			
			配布数	回収数	回収率	配布数	回収数	回収率	
住宅地図の読み取り及び現地踏査	2013.2-2014.12	建物用途の確認/住居、工業、その他の建築面積から混在率の算出/街区内の混在のパターン化	中川東	252	174	69.0%	123	66	53.7%
アンケート調査	2013.10-2014.7	①工場での暮らし方②住居のつながり③地域とのつながり④地域に対する評価	九条南	133	98	73.7%	126	98	77.8%
			加美北	97	54	55.7%	102	58	56.9%
			高井田	139	89	64.0%	99	63	63.3%
観察調査	2014.8-2015.1	開口やベランダなどの位置やつづられ方の外観目録	御幣島	80	67	83.8%	25	13	52.0%

	中川東	九条南	加美北	高井田	御幣島
用途地域	準工業	準工業	工業・1種住居	工業	工業
工場規模	小零細	中小零細	中小	中小	大中
集積産業	印刷・金属・ゴム	機械金属部品	印刷・金属	機械金属部品	鉄鋼・糖紙・石油化学
成り立ち	住宅地	住宅・工場	農村	農村	農村
立地	都心<				>郊外

3 研究対象地の地域・産業特性

(A) 中川東地区 大阪市の東部に位置し、平野川沿いにスプロールした密集住宅地である。長屋や小規模戸建住宅の1室に機械を置き、家内工場を始めたことから、機械部品、金属関連、印刷、ゴム製品、食品、衣服・繊維製品、化学などの小規模工場が集積していった。

(B) 九条南地区 大阪市の西部に位置し、戦前から運河沿いに発展する中小零細工場の集積地である。古くは船舶部品加工が主だったが、機械・金属加工業へと転換した。「地域でひとつの工場」というようにひとつの部品

を完成させるまでに複数工程（複数町工場）を経る横請け（≠下請け）方式での地域内取引が特徴的である。

(C) **加美北地区** 大阪市の南東部に位置し、環状線という主要道路に隣接する住工商農の混在地である。金属や機械器具、印刷などの中小規模の工場が耕地整理により整備された街区に集積している。戦後の農地解放によって実質的な地主となった地元農家が、半世紀の間、用途転換を調整してきている。

(D) **高井田地区** 大阪市の東側に隣接する全国的に有名な中小工場集積地である。大阪市内の町工場の規模拡張移転先として、住工を分離集約させて計画された。

(B) 九条南地区と同様の横請け方式が多くみられ、特殊部品を扱う企業も多く、「このまちで作れないものはない」と言われるほど活気あるエリアである。

(E) **御幣島地区** 大阪市の北西部に位置する大阪市を代表する工業ゾーンである。区画整理による道路新設や河川・運河整備により各種運搬にも優れていたため、鉄鋼業や石油化学業などの大規模工場が集積していった。近年は、工場跡地への大規模マンション開発や新興住宅開発が進行し、住民との軋轢を生んでいる。

4 住工混在地域における混在の様相

4-1 混在率の特性

地区の現況から、工業用途、住宅用途、その他用途の3種類に分類し、各用途の建築面積の割合により、まず街区ごとの総建築面積に占める工場の割合（以下工場率）を算出し、次に3用途の建築面積の割合により、街区を13種類に分類した。なお、住宅併用工場や店舗併用住宅など、2つの用途に属する建物の場合、建築面積の半分ずつをそれぞれの属性に含めている。

工場率の平均は、中川東（21%）や九条南（29%）、御幣島（35%）で低く、加美北（52%）や高井田（52%）では高く、街区を工場率により整理すると、中川東では工場率1%~30%の街区が61%と住宅を主体として混在、九条南では工場率1%~30%の街区が41%、工場率31%~70%の街区が41%と地区全体として混在、加美北では工場率31%~70%の街区が36%、工場率71%~99%の街区36%と工場を主体として混在、高井田では工場率31%~70%の街区が36%、工場率71%~99%の街区が29%と工場を主体として混在、御幣島では工場率0%の街区が36%、工場率31%~70%の街区が39%と工場の無い街区と混在する街区に分かれる（図2①）。

さらに、13種類に分類した街区配置を整理すると、規則的なものと不規則なものが見られる。九条南では、地区南部では工場を主体とした街区、北部や東部では住宅を主体とした街区が集中しており、それをつなぐように住工混在街区があり、高井田ではある程度用途が集約され、地区中央部より北側に工場の割合が高い街区が分布しており、南側には工場の割合が低くなり、

グラデーション状の段階的な変移がみられる。

一方、中川東、加美北、御幣島は不規則である。中川東は主に住宅主要の街区で構成され、地区中央部に工場が主要な街区が固まっているが、住宅主要の街区と工場主要の街区が接するところもあり、地区全体として不規則である。加美北においても、ある程度の集約は見られるが、中川東と同様のことが言える。御幣島では、用途純化した街区が地区内に分散するなど、地区全体として無秩序な混在をしている（図2④）。

4-2 工場率と街区規模

中川東や九条南には500㎡以下の小規模な街区が多く、高井田は全体的に街区規模が大きくなり、1000㎡以上の大規模街区が多い。近似曲線を引くと街区規模が大きくなるほど工場率が高くなっている。これらの3地区では、街区規模が大きくなるほど工業用途の割合が高くなる関係性が見出せる（図2②）。

一方、加美北や御幣島では、街区規模が同程度であっても、工場率には幅があり、近似曲線を引くとわずかに右肩上がりではあるが、ほぼ横ばいであり、街区規模と工場率の関係性は見出せない（図2②）。

4-3 工場率と建物密度

全体に共通して、密度が40%~80%の街区がほとんどであり、散布している（図2③）。近似曲線を引くと、中川東や高井田、御幣島では曲線は異なるものの密度が高くなるにつれ、工場率が高くなる傾向がある。九条南や加美北においても段階的に高くなるが、密度が70%を越えたあたりから工場率が下がる傾向にある。

また、建物密度を20%ごとに5段階に区切り、各段階での平均工場率を算出すると、中川東や九条南、御幣島では近似曲線と同様に密度が高くなるにつれ工場率も高くなり、加美北では密度が高い程工場率も高く、高井田ではどの段階も50%前後とほぼ一定であった。

4-4 混在パターンの特性

工場率が0%と100%を除いた3段階ごとに、街区内の住宅と工場の建てられ方をダイアグラム化しパターン分けを行った。大きく分けると中川東と九条南では7パターン、加美北と御幣島では6パターン、高井田では5パターン存在した（図2⑤）。

中川東では、約半数が混在度の高い街区であり、その他が街区内で用途集約されたパターンである。九条南においても、用途純化した街区では街区内で用途集約されるが、全体的に街区内で不規則に混在するパターンが多く存在している。一方、加美北では工場の割合によらず、比較的、街区内で用途集約されており、高井田でも混在度の高いパターンは少なく、街区内で用途集約されている。御幣島では工場の割合が低い程、街区内で用途集約されているが、工場が主体となってくると混在度も高くなっていく。

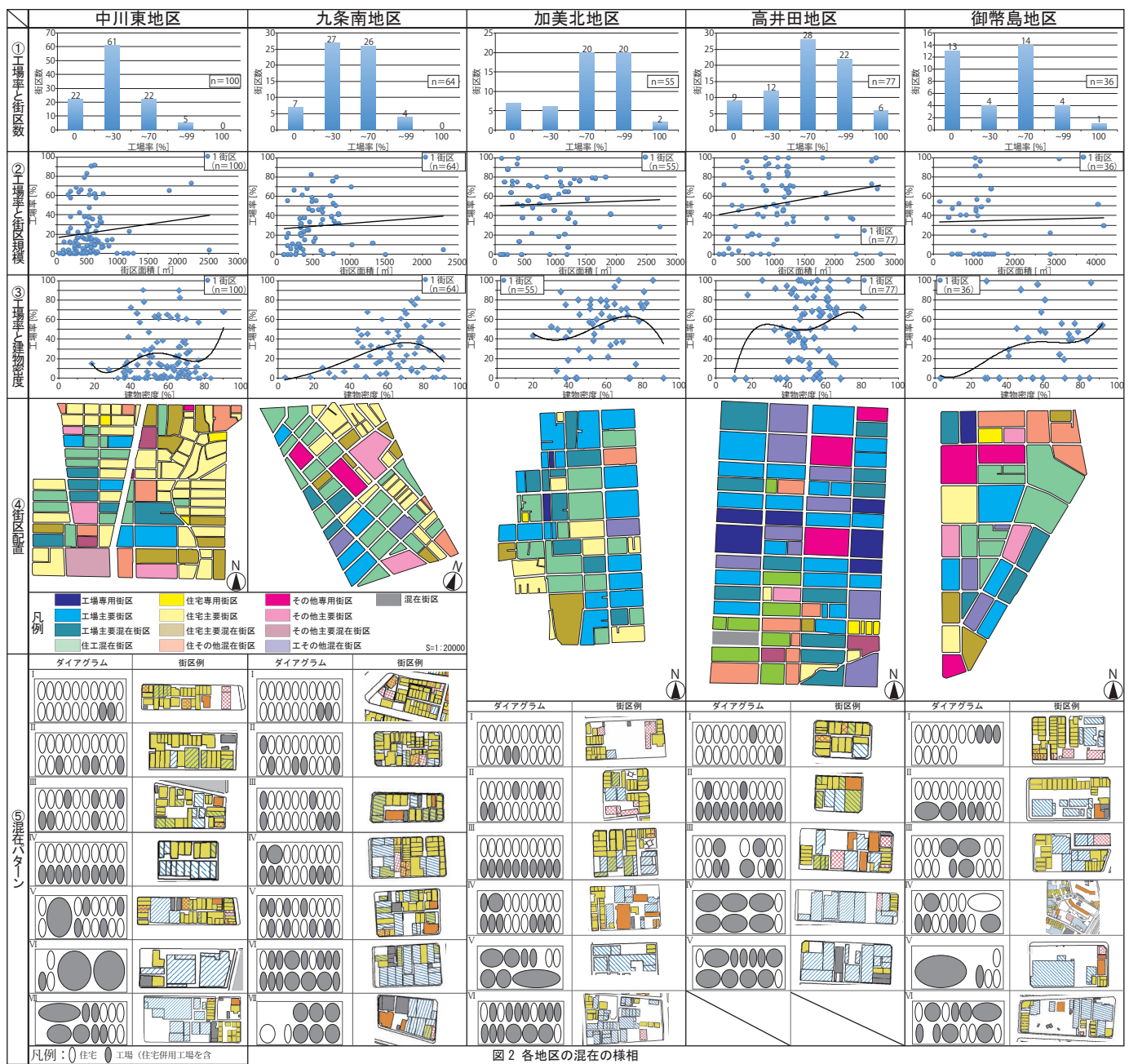


図2 各地区の混在の様相

4-5 隣接街区との関係

中川東では、幅 4m 程度の道路を挟み街区が接し、住宅が主要な街区が多いことから、同一用途の建物が向き合うようになっているところも多くなるが、異種用途が向き合うようなどころも多くある。九条南では、幅 8m 程度の道路を挟み街区がと接し、同一用途や住宅併用工場と専用住宅が向き合うようなどころが多い。高井田では、幅 8m 程度の道路を挟み街区が接し、ある程度同一用途が向き合うように建てられているようにみえるが、工場と住宅が向き合うようなどころも多くみられる。一方、加美北では、幅 5m 程度の道路を挟み街区が接し、多くが同一用途の建物が向き合うようになっている。御幣島では、幅 8m 程度の道路を挟み隣接街区と接し、同一用途が向き合うようなどころもあるが、ほとんどの街区が異種用途の建物が向き合い、さらに工場規模が大きくなることから、工場のうらにあたる所と住宅のおもてが向き合うなどしている。

5 住工混在地域における住民・工場主の意識

5-1 回答者属性

1) **工場主** 中川東や九条南、高井田、御幣島では、操業年数が 30 年以上の工場は 80% 前後あり、平均操業年数はそれぞれ 44 年、48 年、47 年、50 年である (図 4①)。それらの工場は中川東と九条南では約 60% が職住一致工場であり、高井田と御幣島では約 80% が職住分離工場である (図 4②)。一方加美北は、操業年数 30 年以下の工場が 50% 弱で平均操業年数は 33 年と短く、約 80% が職住分離工場である (図 4②)。

2) **住民** 半数以上は工場と関係のない住民である (図 3①)。その住民の居住寿期は、中川東や九条南、加美北においては、昭和以前に住み始めた世帯が多く、長年に渡り居住しており、高井田や御幣島では、平成以降に住み始めた住民が多数いる (図 3②)。居住理由に関しては、中川東と九条南では工場と関係のない住民でも地元であるために住み始めているが、加美北や高

井田、御幣島では工場と関係のない住民には、交通の便や価格などの条件で住み始めている（図3③～⑦）。

5-2 地域の関係に対する評価

1) 工場主がつくる近隣関係 工場操業のためには、良好な近隣関係が必要不可欠である。内容としては、挨拶やおしゃべりを主体とした付き合いをしている。特に、職住一致工場が多い中川東、九条南では「お裾分けをする」が20%弱あり「特にない」が10%前後であることから、密な近隣関係を築こうとしていることがうかがえる（図4③）。一方、職住分離工場の多い地区では「特にない」が20～40%程度あり、挨拶程度の関係でしかないことがうかがえるが、高井田においては「お裾分けをする」が約10%あり、密な近隣関係を築こうとしている工場主とそうでない工場主がいることがうかがえる。

2) 工場主による町内会の牽引 町内会に対しても近所付き合いと同様の傾向がある。町内会への加入理由は「当然」「地域活性化のため」と積極的な回答が各地区

上位にくる（図4⑦）が、職住一致工場が多い地区では加入割合も80%強と高く、職住分離工場が多い地区では加入割合が最も低い地区で約50%と低く、町内会行事への参加や役員への意欲も同様の傾向を示す（図4④～⑥）。しかし、高井田においては、職住分離工場が多いが町内会への加入割合も高く、行事や役員へも積極的である（図4④～⑥）。中川東、九条南、高井田では工場主が町内会に積極的に関わり、地域を牽引していることがうかがえる。

3) 住民の評価 工場主との付き合いにおいて、付き合いにくいとの回答は20%に満たず、付き合いやすいとの回答が上回っている（図3⑧）。九条南では最も評価が良く、中川東、高井田では良いとの評価は低くなり、良くないとの回答割合が高くなる。地域の付き合いの評価においても同様に九条南では親密と評価されているが、中川東、高井田では、親密と疎遠が拮抗している（図3⑨）。工場主の地域への関わり方に対して、九条南では評価しており、中川東、高井田では評価して

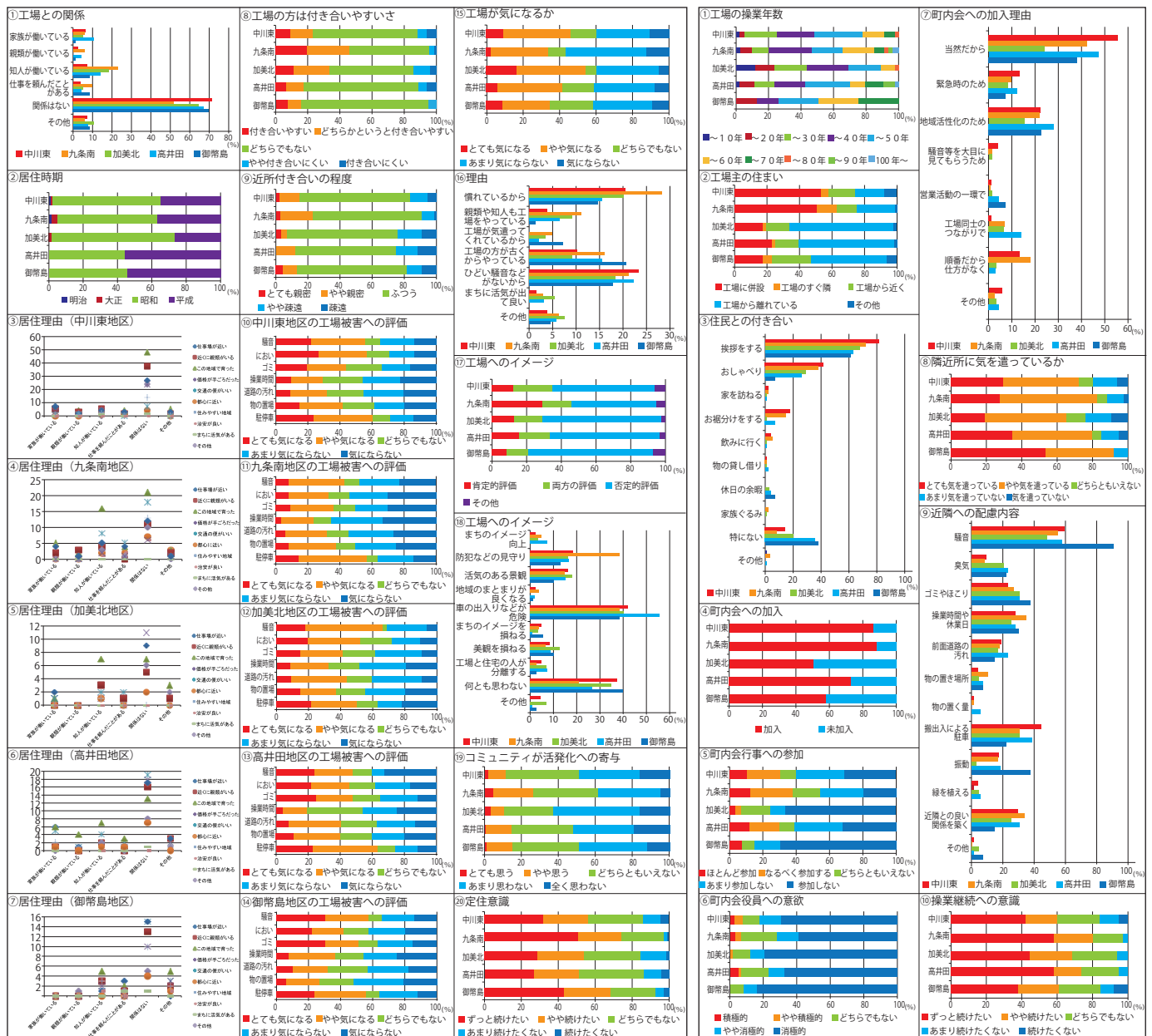


図3 住民の評価

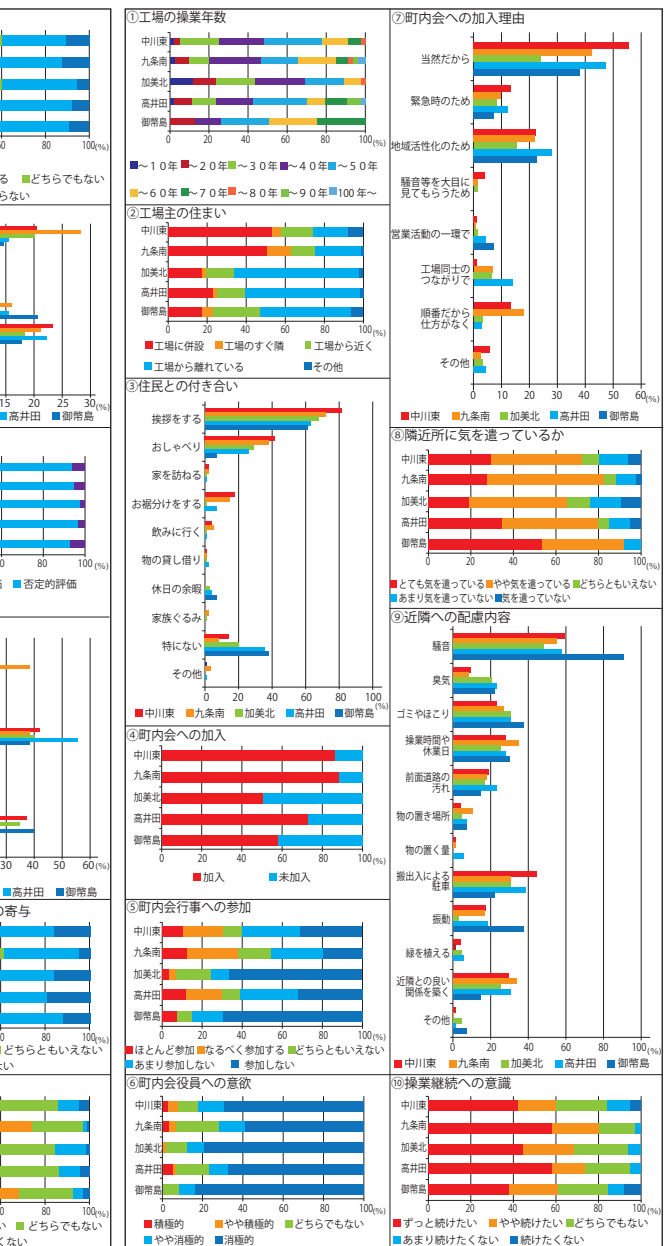


図4 工場主の評価

いない住民も多くいることがわかる。一方、加美北は30%強が付き合いやすいと評価しているが、付き合いにくいとの評価は最も高い10%強もあり、地域の関係を疎遠であると評価していることから、全体として工場主の地域への関わり方を評価していないと言える(図3⑧、⑨)。御幣島においては、一定の評価はあるが、どちらでもないとの回答割合が高いことから、工場との関わりが薄いことがうかがえる(表3)。

5-3 工場被害に対する折り合い

工場主は被害そのものに配慮することはもちろんのこと、近隣関係を良好にしようとしていることが特徴的である(図4⑧)。工場主が行っている近所付き合いと照らし合わせると、中川東や九条南、高井田では、密な近隣関係をつくろうとしていること、加美北、御幣島では、挨拶をすることで近隣関係を良好に保とうとしていることがうかがえる。特に御幣島では、近隣関係を良好に保とうとする意識が低く、被害への配慮は高いことから、被害そのものへの配慮をすることで折り合いをつけようとしていることがうかがえる。

その配慮に対して、九条南では工場主が配慮する多くの工場被害に対して、気にならないと評価しており、高井田でも、九条南に10%程度劣るものの同様の傾向を示しており、折り合いがついていると言える(図3⑩、⑪、⑫)。一方中川東では、工場主が配慮する騒音やにおい、搬出入に伴う駐停車の項目で60%前後が気になると評価しており、御幣島でも、ほとんどの工場主が配慮している騒音に対して60%弱、配慮の割合が低い駐停車にも60%弱が気になると評価しており、折り合いはついていないと考えられる(図3⑬、⑭)。加美北では全体的に工場被害が気になると評価しており、配慮の割合が低い騒音へ気になると評価しており、配慮の割合が他地区と同程度の駐停車には気にならないと評価するなど、すれ違いが起こっている(図3⑬)。

5-4 地域に対する評価

全地区共通して75%以上が工場を多いと感じているが、九条南では60%弱、その他の地区では約40%が気にならないと回答している(図3⑮)。その理由としては「慣れている」や「工場の方が古くからやっているから」「ひどい騒音などが無いから」に回答が集中しており、ある程度許容できる関係ができていくことがうかがえる(図3⑯)。

工場があることに対する評価をみると、肯定的な回答のみしている割合は御幣島(9%)→中川東(13%)=加美北(13%)→高井田(16%)→九条南(30%)の順に高くなる(図3⑰)。また、約10%~20%の住民が否定的な回答をしながらも肯定的な意見へも回答している。それらの内容をみると「見守りになる」「活気ある景観」という肯定意見、「車が危険」「何とも思わない」とい

う否定的意見に回答が集中している(図3⑱)。工場が地域コミュニティの活性化に寄与しているとの評価も同様の傾向を示している(図3⑲)。工場主が地域に関わることで、住工が混在するデメリットを補い、それに対して住民は、日中工場に人がいることで地域が活気づき、地域の見守りの存在となると有益に捉えられていると考えられる。

5-5 定住意識

60%以上の工場が今の地域で操業したいと回答しており、操業を続けたくないとの回答は多い地区でも20%に満たない(図4⑩)。住民も半数以上が住み続けたいと回答している。特に、九条南では70%強が住み続けたいと回答しており、住み続けたくないとの回答はごく少数である。御幣島も同様に、70%弱が住み続けたい、10%弱が住み続けたくないと回答している。中川東、加美北、高井田では、50%強が住み続けたい、15%程度が住み続けたくないと回答しており、前2地区よりやや劣る(図3⑳)。

この差は、住工混在に対する評価が関係していると考えられる。工場を肯定的に捉えられている地区ほど愛着や定住意識も高く、否定的に捉えているほど定住意識が低くなる傾向がある。しかし御幣島では、工場を否定的に捉えているが定住意識は高くなっている。居住・操業を続けたいしたい理由を見ても、その傾向はうかがえ、九条南では愛着があるといった肯定的な意見があり、その他の地区では、肯定的な意見から定住したいと考えもあるが、移住が困難といった否定的な理由による定住意識もみられる(表4)。

表3. 近隣関係に関する代表的な意見	表4. 地域への定住に関する代表的な意見
【中川東地区】 ・工場の方と話す機会がないし町会の行事にも余り参加する事がないのでよくわからない。 ・町内会の行事など参加されない ・町会の中で、住宅と工場と会社が多いの、工場と会社ですので、町会の行事がうまくいかない。 【九条南地区】 ・地域の役員を町工場の方々引き受けてくださり、色々な行事に関わっている ・工場主である経営者は、地域の活動の役員さんボランティア等で社会に貢献しています ・地域活動のリーダーとして社長さんが活躍している ・工場主達はほとんどおやのあとを次いでいらして相当長い間地域と関わっている。子供会や地域の役員として下さる方も多く、小学校中学校の役員をしておられる方もおりコミュニティが活発というほどではなくとも何かをすることが当然という感じを受ける。 ・元々町工場が多い地域で以前から住んでいる方がたくさんおられ、それなりに地域活動に参加されている 【加美北地区】 ・地域の事、お世話してくれています。 ・工場の経営者や従業員は他所に住まわれている方が多いから参加しない ・現在は町会も消滅しています。住民も減り昔からの工場も少なくなっている為でしょうか。 【高井田地区】 ・高井田地区では個人事業者が地域のために活動している事が多く、大変な中ががんばってくれている ・地域、行事に協賛してくれるので、地域がうるおう。 ・工場主の地域参加が少ない。 【御幣島地区】 ・地元の自営業の方が町会役員をやってくれている ・町工場の社長さんが地域の役職についている事が多い	【中川東地区】 ・住み慣れている事は、何よりも心強いから住> ・特に不都合も不便もかんじていない。この地域で生まれ育ったから住> ・近所との付き合いは余り密接になり過ぎず 自分にとっては頂度いいと思う住> ・操業には何かと便利で苦情を言う人もいない<工> ・他地域に移るには費用がかかるから<工> 【九条南地区】 ・生まれ育った地域であり、商店街も歩いていけ、高年齢に近づいていくにあたり便利である<住> ・近所付き合いがしやすく良い所だから住> ・子どもや孫も近くにいる、友達もたくさんいるので離れたくない住> ・私の代で3代目になり、母方の祖父もまたこの近くで操業していたので続けていきたい<工> ・古くから住んでいる人が多く、同級生が多い<工> 【加美北地区】 ・生まれ育った住み慣れた地域で安心感がある<住> ・生活の基盤がここにある以上他にはいけない。<住> ・他の住宅街で住みたいが移り住むことが困難<住> ・長くしてると、工場を変えるとお金もかかる<工> 【高井田地区】 ・長く住んでいる為、愛着がある。別の場所に住みたいと思っただけではない<住> ・予算が出来れば離れたいく<住> ・長年の操業でこの地を離れたくない<工> ・設備を移転できない。多額の費用がかかる。<工> 【御幣島地区】 ・長年生活している為、他の土地には行くつもりはありません<住> ・住み慣れた場所が良い<住> ・80年以上続けているので、このまま地域に根ざして頑張りたい<工> ・移転不可<工>

6 住工共存の特性

6-1 中川東地区の共存特性

住宅が主要な混在街区が大半を占め、それらが集中する所、工場が主要な街区を一部に集中する所とある程度用途が集約され、固められたこと、街区規模により用途を調整していることから混在が成立してきたと考えられる。4m程度の道路を挟んで街区が接することなどから、工場被害も受けやすいところもできていると考えられ、工場主が地域に対して積極的に関わり、日頃から密な関係を築くことで、工場被害に対してもある程度許容できる関係をつくり、デメリットな部分をカバーすることで共存していると考えられる。

6-2 九条南地区の共存特性

地区全体として、職住一致工場が主となって混在した街区が住宅から工場への段階的秩序を持って配置されていることや、職住一致工場と専用住宅と混在させ、専用工場と専用住宅に物理的な距離をつくること、街区規模に合わせ用途を調整していることから混在を成立させたと考えられる。さらに、工場主が地域に対して積極的に働きかけ、日頃からの濃い近隣関係をつくっている。秩序をもった混在がされている上に、単一用途地域ではなし得ない豊かな近隣環境を形成することで、デメリットを上回るメリットを作り出し、共存していると考えられる。

6-3 加美北地区の共存特性

混在した街区も多く、無秩序な混在であるようだが、ある程度街区ごとに用途集約することや街区内で住宅と工場が混じりすぎないようにゾーニングされていること、隣接街区で同一用途が集約されるように建てられていることから、職住分離工場が多く、近所付き合いは挨拶程度で近隣関係は薄く、工場主の地域への関わり方は消極的であっても住宅と工場が同じ地区に存在することを成立させていると考えられる。

6-4 高井田地区の共存特性

街区ごとにある程度用途純化させていること、工～住へと段階的に工場の割合が減るような秩序をもって街区が配置されていること、街区規模に合わせて用途を調整することで、工場と住宅との物理的な距離をつくり、直接的な被害を緩和させながら、混在を成立させていると考えられる。さらに、職住分離工場が多いが、工場主は地域に積極的に関わることや濃い近隣関係をつくることである程度は許せるような関係をつくり、デメリットな部分をメリットな部分でカバーすることで共存していると考えられる。

6-5 御幣島地区の共存特性

街区ごとに純化されているようだが、大規模専用工場のうらに専用住宅が建てられていることや、工場が主要な街区に住宅が主要な街区が接するなど、無秩序

な混在であったが、工場規模が大きく、敷地も広く取られていることや道幅が広いことから、地区全体として、密度が低く保たれている。密度を低くすることで、直接的な被害が緩和され、差し迫った問題にまでは発展せず、近隣関係が希薄であっても、同じ地区に住宅と工場が存在することを成立させていると考えられる。

7 まとめ

街区規模に合わせ用途を集約しながら住～工への段階的な変移をつくること、建物単位で隣接街区との用途を統一をさせること、混在する街区では建物密度を低くすることなど混在の状況をコントロールすることにより、住宅と工場が地区内に併存することは可能となると考えられる。

しかし、工場操業に伴う音やにおいといった混在することのデメリットが存在する。それは、工場主が日頃から近隣への配慮をし、良好な近隣関係を築くこと、工場主が町内会役員などに着き、地域を引っ張っていくなど地域に対して積極的に働きかけるとデメリットな部分が補われ、共存を果たしていると言える。さらに、密な近隣関係が築かれ、地域に対して工場主が積極的であると、工場が地域の見守りの存在として働いていると評価されるように、混在することのデメリットを上回る混在することでのメリットがつけられている。

また、併存型の共存をしている地区においても、工場主が地域に対して積極的に働きかけること、工場主と住民をつなぐようなソフト面を構築していくことで、今後、混在することのデメリットをメリットと変えられるような共存共栄型の共存にしていくことが可能であるとも考えられる。

参考文献

- 1) 三村浩史, 北條蓮英, 安藤元夫共著 (1978) 『都市計画と中小零細工業』新評論
- 2) 角田優子 (2009) 『職・住・地域の関係からみた町工場の評価』大阪市立大学
- 3) 大阪役所 (1957) 『加美村誌』大阪役所
- 4) 大阪府中河内郡加美村 / [編] (1952) 『加美村実態調査: 大阪府中河内郡』大阪府中河内郡加美村
- 5) 木村小 / 編集 (1939) 『中河内郡加美巽長瀬三ヶ村聯合耕地整理事業誌』中河内郡加美巽長瀬三ヶ村聯合耕地整理組合事務所
- 6) 平野区誌刊行委員会 (2005) 『平野区誌』平野区誌刊行委員会
- 7) 生野区創設十周年記念事業実施委員会編 (1953) 『生野区史』生野区
- 8) 西区史刊行委員会 [編] (1979) 『西区史』清文堂出版
- 9) 大阪都市協会編 (1996) 『西淀川区史』西淀川区制七十周年記念事業実行委員会
- 10) 東大阪市史編纂委員会編 (1997) 『東大阪市史 近代II』東大阪市

討議

討議 [佐久間先生]

予告していたとおりなんですけど、研究の新規性というか、既往研究と比べて新しい点、この研究のオリジナリティというのがどこにあると考えるのか、お願いします。

回答

これまでの研究でしたら土地利用の変化であったり、混在の状況が住民の意識といったことはそれぞれ評価されているんですが、それらの関係性の考察がなされていないということから、この研究はそこに意義があると考えます。

討議 [佐久間先生]

コメントですけど、地区の分析とかアンケート調査とかはすでに報告されていることが多いと思ったんですけど、敷地の分析とか、道路挟んだ反対側の分析というのは、建築計画的視点というか、スケールが落ちてきて、用途の関係を分析しているのがすごく面白かったのと、それがもう一回地区に戻ると、地区特性というものに返っていけるとより面白かったと思います。

討議 [倉方先生]

なんか行政のレポートを延々と聞かされているような感じで、結局結論は色々あるという以上のものはなんにも感じられなかったんですけど、今後の指針を導き出すというのが研究だと思うのですが、各地域色々あるという事じゃなくて、住工混合地域がそれなりのいいところがあるから、たぶん研究しようと思ったんですけど、なんかこれからのこう、なんかそれを良くしていくという方策っていうのは分析から何か見つけられましたか？

回答

そうですね、たとえば九条南のような段階的な秩序を持った混在配置というものは、一般的に音とかと言ったようなデメリットも生み出すと思うのですが、こういった配置にすることで近隣関係を良好に築こうとする工場主の意識が働くことであるとか、それに対して住民の方は工場に人が一日中居ることから、地域に対しての見守りになるといったような、見守りの存在としての認識をしていることから…

討議 [発言者の氏名]

こういう配置に変えられますか？こうじゃないところを、こういう配置に行政なり民間なりが変換することができますか？

指針にならないですよ？これからどうしていったらいいかと言うことを出さないと、やっぱり論文じゃないと思います。なんか、たぶん埋もれている

から、受け取る側が気がついていないだけなんで、今回やっていたら、全体、どういう仕組みにすごく意義があるだとか、なんかない？

回答

こういった九条南のような混在パターンになると、普段から近隣関係というものは築かれていくんですが、加美北のような密度の混在パターンというものは、近隣関係を築かなくても成立できるような配置になっていると考えられます。そこからソフトの面ですと住民と工場主というものがどういうふうに関わるか、どう地域に対して関わっていくかと言うことは重要になってくると思いますし…

討議 [佐久間先生]

倉方先生の続きですけど、高井田の取り組みは何か参考になることはないですか？

回答

高井田の取り組みですと、中小工場の廃れたときには、中小工場の跡地には中小工場であったり、戸建ての小規模な住宅であったりというものを、変えていくのはいいとしていると思うんですが…

討議 [佐久間先生]

えっあの…割と、割とトスを上げたつもりで…打ち込んでくれればいいんだけど、トスを上げたつもりなんですけど…

高井田地域のルールって都市計画的都市再生で、その中で、敷地の分析がヒントになるようなことが答えとして言ってくれれば良かったなと思いますけど…

討議 [吉田先生]

過去に抜けていった工場とかそういったところまで調べているんですか？音を出すとか、この場では安定して操業できないという工場は、こういった所から抜けていっていると思うんですが。

回答

大まかな変遷というものはたどっています。特に高井田や御幣島という工場が大きくなるほど、そういったことが起きてきます。高井田ですと工場跡地に建てられた専用住宅群から隣接工場に苦情がでていたということは起こっていますが、問題となった工場が出て行っているかまでは調べられていません。

討議 [吉田先生]

特に、今言ったような問題点が、どんなシチュエーションで起きているかという方も、もうちょっと細かに見ていってほしいなというか、どちらかというと「地域の差」というものを見ていって、上手く折り合いを成しているかどうか側面から見ているん

ですけど、逆にうまくいっていない所というのは、
どういった条件で発生しているのか、そういった所
を加えて頂いたら嬉しいと思います。